

2023（令和5）年度 実践FS報告書

実践FS研究課題名	（和文）「持続可能性」の基底価値の把握とそれに基づく地球規模課題の認識・実践の文化間比較
	（英文） Grasping the base values of "sustainability" and cross-cultural comparison of cognitions and practices on global sustainability concerns
実践FS提案者 （所属・職名・氏名）	山田 肖子 名古屋大学大学院国際開発研究科 教授
所属プログラム	環境文化創成プログラム（松田素二 プログラムディレクター）
プロジェクト期間	2023年4月1日 ～ 2024年3月31日

本報告書はFSの研究成果として地球研ホームページに掲載します。

1 研究概要

本研究の概要について記載してください。

本研究は、「持続可能性」という言葉を媒介として、人々が何について語っているのか、その背景にはどのような価値観があるのかを探ることからスタートした。「持続可能性」概念を言説分析の入り口としたのは、その言葉が地球環境と人間の社会経済活動の関係について危機が叫ばれたした 80 年代後半に生まれ、特に 2015 年の国連サミットで持続可能な開発目標(SDGs)が採択されて以降、明らかに使われるコンテキストや使用者のすそ野が広がったためである。時代性を如実に反映するこの概念を通じてこそ、人々が相互行為をし、その結果として制度や法に関するシステムの変更がなされ、人々の生活世界での行為に影響する様子をとらえることができると考えた。

まず、本研究の IS では、インターネット上に公開されている文書のうち、「持続可能* 定義 | 意味」(*は、その前に記載された語幹を持つ単語を網羅的に検索するブーリアン検索ルール)というキーワードでの検索でヒットしたものを、1990 年から直近に掲載されたものまで大量にダウンロードし、**テキストマイニング**の手法を使って分析した(p. 26, 参考資料 I)。その結果、抽出された「持続可能性」との共起性の高い単語やフレーズを対立する概念群（都市－農村、将来－過去、改革－現状維持など）と「持続可能性を脅かす問題」として認識されている者（災害、ゴミ、貧困、平和、文化など）についての個人の認識を知るため、**オンラインの質問紙調査**をフィリピンとケニアでそれぞれ 100 名ずつを対象に実施した。また、学術論文のレポジタリーである Web of Science 所収の論文の中で、Sustainab*をタイトルに入れている論文の研究分野の分布についても分析した。

FS に進んでから、上記の質問紙調査の結果を分析した。その結果、「持続可能性」を**ボトムアップのプロセス**と考える人と、**トップダウンのプロセス**と考える人には、課題認識や行動原理に大きな違いがあることが分かった（p. 27, 参考資料 II）。前者は、自分の先祖や地域社会の過去から現在につながる生活に根差したものとして「持続可能性」をとらえ、革新の必要を認識する傾向が強いのに対し、後者は国家、特に先進国が地球の未来のために行うべき課題として、自己の現実と切り離して考える傾向が見られた。

2 実践FSで得られた成果

実践FS期間中の研究成果（手法の開発や組織の形成を含む）を具体的に記載してください。また、成果物があれば具体的に示してください。当初予定していた目標の達成の成否とその理由を述べてください。

インキュベーション研究では、（1）既刊の学術書や論文の中で、特に持続可能性の基底価値に当たると思われる哲学や思想に関する文献を読み、基底価値を整理する3つのベクトル（(a) 世代内⇔世代間の衡平性、(b) 資源としての自然⇔生物圏の中の人間、(c) 公共益としての持続可能な開発を実現するための民主主義の枠組み）を抽出した。さらに、（2）研究論文のなかで持続可能性がどのように論じられ、それが基底価値の3つのベクトルと整合するのか、何等かの偏りがあるのかを明らかにした。

これらに基づいて、フィジビリティ研究（FS）では、ウェブ上に1990年から2021年までに公開された文献で「持続可能性」概念とともに用いられる単語の出現傾向を分析し（参考資料 I）、それをもとに**質問票を試作**した。まず、テキスト分析から把握した持続可能性に関する基底価値、「持続可能性」との共起性が高かったフレーズやそれが関連するアクターや時間軸、マクロかミクロか、といった対象単位について、回答者が何を重要な問題だと感じ、どうすればそれが解決できると思うかをランキングや得点配分などによって定量的に評価してもらうようにした。同時に、心理学で使われている既存のイデオロギー尺度、道徳基盤尺度、性格傾向尺度も使い、回答者の通常の価値観と、持続可能性に関する考え方や態度、行動がどのように関係するかをとらえようと試みた（参考資料 II）。

2023年度はじめに、文化やコンテキストが異なる人々を対象に実施する質問票を、フィリピンとケニアにおいて206名を対象に実施した（**質問票調査の試行**）。この試行段階の質問票調査からも、「持続可能性」をボトムアップのプロセスと考える人と、トップダウンのプロセスと考える人には、課題認識や行動原理に大きな違いがあるなど、一定の価値観や置かれた状況によって、回答傾向に違いが出ることが分かった（参考資料 III）。ボトムアップの志向性が強いとみなす人々は、「持続可能性」を過去からつながっている/これまで行ってきたことである、先進国よりは途上国の課題である、伝統的な価値観や自分が所属する社会集団への帰属意識と関わっているとみなす傾向があった。他方、トップダウン型の人々は、「持続可能性」を未来（将来世代）に関わるものとみなす一方、ごみ処理や貧困など、先進国の短期的かつ小規模の現実的な問題であると考えた傾向があった。質問票調査の結果からは、ボトムアップ型の人々に、自らの属する社会への帰属意識や伝統、過去からの連続性への思いがみられることから、これらの人々の認識を深く聞き取ることで、周縁化された認識論の再構築が可能なのではないかという感覚を得た。その一方で、質問の記載方法や構成に問題があることや、回答者の選定、プロセス管理などの課題も分かり、FR調査に向けて、質問票の調整、精緻化を進めることとなった。

同時に、研究メンバーの中から、グローバルな言説を出発点とした演繹的なモデルづくりと、そこへの個人の認識の当てはめでは、多様な認識枠組みとそこに内在する価値観はとらえられないとの反省が出た。そこで、FS段階では、概念や基底価値の分析を続けつつ、エスノグラフィ（民族誌学）の視点で、ボトムアップで「持続可能性」概念を捉えるため、農村部、都市、教員、農業生産者など異なる属性の参加者を得て、**4つのフィールド・4つの視角からフィールドワークを試行**した。具体的には、研究メンバーが従来から関わってきた a. 秋田県農村部の移住者と従来からの居住者、b. 岐阜県農村部の有機農業実践者、c. 神奈川県の小学校で「持続可能な開発のための教育（ESD）」を実践している教員、そして、d. 愛知県の大学でボランティアや社会的活動に積極的にかかわっている学生が調査に参加した。

インタビューでは、異なる対象グループに対して、同じアプローチでやり取りをすることで、参加者の言葉で表現してもらいつつ、共通の座標軸上で特徴が照らし出せるように工夫した。具体的には、まず、導入部で、「持続可能性」という言葉を使わずに、「日常の中の価値」、「それを維持するための工夫など」について雑談を行った。これは、生活感覚が

ら乖離した外生的な概念でインタビューを始めずに、参加者自身にとって納得感があり、日常性の中での「持続可能性」の基底価値を想起してもらうためである。続いて、本題では、グローバル言説としての「持続可能性」について、参加者がどのような認識や批判的考察を持っているかを把握するため、下記を行った。

- 「持続可能性」と聞いて思いつく単語を複数挙げてもらう
- 「持続可能性」概念の主要な領域である「環境」「社会」「経済」「世代間公正」につき、それぞれ重要と思う度合いとその理由を聞く
- 「持続可能性」とは何かを参加者自身の言葉で定義してもらう

最後に、自分の身の回りのことで、「持続可能だと思うこと」と「持続不可能だと思うこと」を聞き取った。これは、「持続可能性」という概念のポジティブなイメージのみに傾倒した聞き取りに終わらず、参加者の視点での批判的考察も示してもらうことを意図したものである。

この 4 対象群へのインタビューを通じて、「持続可能性という言葉からは、何かを本質的に変えようとするより、現状を維持しつつ延長する発想が感じられる」といった批判的なコメントが複数聞かれた。個人主義、近代化論の延長線上で措定されている「持続可能な」開発の思想への違和感があることが見て取れた一方で、地域での人とのつながりや人間と自然の双方向的な関わりについて述べる者も少なくなかった。「つながり」「関係性」というキーワードが、都市、農村で年齢や状況も異なる参加者から共通して聞かれたことは、今後の研究に重要な示唆を得たと言える。

3 実践FS期間中の業績リスト

最新から過去まで順番に通し番号を記入し、FS 責任者には二重下線、FS メンバーに一重下線を付け、査読の有無を記載してください。

標準項目（「書籍等出版物」、「論文」、「MISC」、「講演・口頭発表等」、「Works(作品等)」、「メディア報道、受賞」）を主として記載することとし、その他本共同研究の運営に貢献すると推定される共同研究や社会での実践的な取り組みの成果は「その他」に記載してください。

●書籍等出版物

1. 山田肖子(編著)(2023)『「持続可能性」言説分析』東信堂、109 ページ。
2. 工藤尚悟. (2024 予定). あいだの開発学の可能性 - 秋田と南アフリカの起業家たちの学び合い. 真崎克彦、藍澤淑雄 (編)『地域主義の意義と可能性 - ポスト資本主義時代の価値創造』明石書店。(編者による査読あり)
3. Shimazu, Yuki., Tsujimoto, Atsushi., and Yamada, Shoko. "Japan's Government-led and Private-sector-led Cooperation for Industrial Human Resource Development in Developing Countries: Changing Patterns of JICA's and AOTS's Projects." Ye, M.H., and Jiang, M. (Ed.) Technical and Vocational Education and Training. IntechOpen. DOI: 10.5772. (査読あり)
4. 木山幸輔(2023)「貧困とどう向き合い、考えていくか? : あるコンゴ人医師による提起と政治・思考」飯田高・砂原庸介・近藤絢子・丸山里美編『世の中を知る、考える、変えていく——高校生からの社会科学講義』有斐閣、174-187 頁。(招待あり)

●論文

1. Yamada, Shoko (2024 forthcoming). "The Synchronic and Diachronic Evolution of Key Themes around SDG4 after 2015: From a Quantitative Analysis of Web-Downloaded Texts." International Review of Education. (査読あり)

2. Yamada, Shoko and Simon McGrath (2023). "Skills for Development and Vocational Education and Training: Current and Emergent Trends" The editorial for the special issue "Skills for Development Revisited," Editorial for the special issue "Skills for Development Revisited". International Journal of Educational Development, Vol. 102, 102853, pp. 1-9.
3. Yamada, Shoko (2023). "Constructivist Analysis of Cross-Sectional Data on Varieties of Skills: Soft Skills, Hard Skills, Personalities, and Workplace Rewards in Ghana and Ethiopia," in Shoko Yamada and Simon McGrath (eds), special issue "Skills for Development Revisited," International Journal of Educational Development, Vol. 102, 102851, pp. 1-10. (査読あり)
4. Emmanuel Estrellado, Pimmada Charoensilp, and Shoko Yamada (2023). "The effects of game-based soft skills training: A quasi-experiment with Ethiopian garment workers," International Journal of Educational Development, Vol. 101, 102823, pp. 1-9. (査読あり)
5. 西川芳昭 (2023) 「種子と人間の豊かな関係から考える持続可能な農業」 ACADEMIA (193) 41-55. (招待あり)
6. Yonehara, Aki, and Arora, V. (2023 forthcoming). 'Potentials and mechanisms of Translocal Learning for ESD: Through the action research of ACCU's India-Japan Teacher Exchange Program.' The bulletin of Department of Sociology, Toyo University.
7. Sasaki, O., Yonehara, Aki, Kitamura, Y. (2023 forthcoming). 'The Influence of the Whole School Approach on Implementing Education for Sustainable Development in Japan.' "Prospects." (査読あり)
8. Luke Dilley, Menelaos Gkartzios, Shogo Kudo, Tokumi Odagiri. (2023 forthcoming). Hybridising counterurbanisation: Lessons from Japan's kankeijinkō. Habitat International. (査読あり)
9. 木山幸輔(2023)「ショックを用いる貧困表象の道徳的・政治的悪性に関する一考察：貧困表象への留意のために」『筑波法政』91号、17-40頁。(査読あり)
10. Kiyama, Kosuke (2023) "How Should Human Dignity be a Ground for Human Rights? A Preliminary Exploration," Ratio Publica, Vol, 3, No.1 (June 2023), pp. 6-20. (査読あり)

● MISC

1. 山田肖子・江口潔・松浦良充「座談会「知識」①－多様な知識のありよう」「②－評価の問題」「③－教師に残るもの」「④－学校でしか学べないこととは」「⑤－人間中心主義をどう考えるか」『教員研修』2023年9月号～2024年1月号（5回連載）。
2. 西川芳昭「農材漁村の持続性を支える「風の人」の機能を再考する」週刊農林 2514号 4-5 2518号 4-5 2520号 4-5 2023年6月-7月 3回連載
3. 西川芳昭「「農民主体」が息づく日本の協力 国家だけでなく農民も地域住民も持つ食料主権」国際開発ジャーナル (798) 16-17 2023年6月
4. 西川芳昭「自然と人間、土と人間の視点から問う人新世を生き続けるための2つの原論」国際開発ジャーナル (798) 27 2023年6月
5. 西川芳昭「多様な品種の種子管理に積極的な貢献を期待」自然尊重 (78) 11 2023年10月
6. 西川芳昭「書評 有機農業でつながり、地域に寄り添って暮らす：岐阜県白川町ゆきハートネットの歩み」有機農業研究 15巻2号 掲載決定（2023年12月刊行）

● 講演・口頭発表等

1. 山田肖子・島津侑希、米原あき、西川芳昭、工藤尚悟、木山幸輔（冒頭 3 組による口頭発表 + 2 名によるコメント）（2023）「ラウンドテーブル『持続可能性』の多義性を問うー言説分析、認識調査、評価の先に何を見るか」 国際開発学会第 34 回大会 2023 年 11 月 12 日、上智大学
2. Yamada, Shoko (2023/10). Keynote address. "Changing Concepts of Sustainability and their Implications to Teaching: Based on a Quantitative Analysis of Web-Downloaded Texts since the 1990s." 2023 Annual Conference of the Asia-Pacific Association for Teacher Education: Connecting Multiculturalism, Sustainability, and Teacher Education. October 19, 2023. Taipei: National Taiwan Normal University.
3. Yamada, Shoko (2023/10). Keynote address. "Assessing and Training Soft Skills of Working Youths: Introducing the Program by the SKY - Skills and Knowledge for Youths - Project." Japan Society for Afrasian Studies 2023 Annual Conference. Oct. 7, 2023. Aichi Gakuin University.
4. 山田肖子（2023/4）講師、『SDGs 時代に求められる新しいスキル（知識基盤社会での問題解決スキル）』第 3 回 開発分野における教育セミナー、一般財団法人国際開発機構（FASID）、東京及びオンライン。
5. 西川芳昭（2023/6）講師、「CSA（コミュニティ支援型農業）に学ぶ食と農の未来」川崎市民アカデミー講座『SDGs と環境・みどり・防災』2023 年 6 月 25 日
6. 米原あき（2023/11）講師、「SDGs の『達成度を測る』を再考する：ポスト SDGs の『価値を引き出す評価』に向けて」第 257 回 FASID Brown Bag Lunch Seminar。（招待あり）
7. Yonehara, Aki (2023/8) 講師. "Bridging the practice and the academics: How to write an academic paper based from the practical experience." The 45th SLEvA/APEA Webinar.（招待あり）
8. 米原あき（2023/4）講師、「公立小学校における協働型プログラム評価の実践：ESD スクール・マネジメントへの伴走」一般社団法人 実践家・当事者参画型エンパワメント評価（PBEE）研究・研修センター。

●メディア報道

1. 山田肖子（2023）インタビュー記事「AI 時代の今こそ人間と教育の役割の再定義を（前・後編）」Kumon Now. 公文教育研究会. https://www.kumon.ne.jp/kumonnow/special/074_1/
2. 西川芳昭（2023）取材記事「タネを未来に 採種者の経験と英知を」家庭栄養研究会『食べものの通信』2023 年 11 月号 2-4.
3. 米原あき（2023）インタビュー記事「教職員の国際交流事業の意義とは」公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター『ACCU NEWS』No.418, pp.4-5.

●受賞

1. 西川芳昭（2023）日本 N P O 学会 学会賞選考委員会特別賞 北野収・西川芳昭編著『人新世の開発原論・農学原論 内発的發展とアグロエコロジー